

D・H・ロレンスを通して見る死の教育の必要性

——「死」との対峙から「生命の輪」へ——

田部井 世志子

要約

人間はパスカルがいうように否応なしに死刑囚の状況を背負わされている。しかし、とりわけ「死の現実性」を社会のあらゆる所から覆い隠そうとする企図が支配する現代社会において、大抵の人間は日常の営みに忙殺され、それを意識することはほとんどない。そういう意味でも、生について真摯に考えるためには、今、むしろ死の教育が必要だといえるだろう。

D・H・ロレンスといえば一般的には性あるいは生に根差し、生命力を謳歌した作家・詩人ということで知られている。生に徹底的にこだわったロレンスであるが、彼が死とどのようにかかわったのかという問題については、従来、批評家が殊更関心を示すことはなかった。そこで本論では、まず、ロレンスが若い頃から、とりわけ後半生において、生のみならず「至上の超越者」ともいうべき死にいかに取り憑かれ、死の問題と対峙してきたかをざっと見ていき、彼が死に対する想いをどのように表現しているのかを、主に中・後期の随筆等を中心に検証する。その過程を通じて、エトルリアの遺跡巡りがロレンスの死生観に与えた影響がいかに大きかったかが明らかとなるだろう。

本稿の目的は、これらの作業を通じて、「生命の司祭」としてのロレンスの一般的なイメージを大きく覆すと同時に、生命の充実や謳歌には、死との対峙、その理解と受容がなくてはならないという人間の真実に改めて目を向けることにある。

キーワード

生命の輪、死の教育、ロレンス、「エトルリアの遺跡」、死生観、表層、深層、「深みの想像力」

はじめに

人間はパスカルがいうように否応なしに死刑囚の状況を背負わされている。仲間が「眼前で刺殺され」るのを見つ、「その状況のうちに自己自身の状態を見、悲痛と絶望をもってたがいに顔を見あわせながら自分の番が来るのを待」(103) つかという運命を余儀なくされている。しかし「死の現実性」を「社会のあらゆる所から覆い隠そうとする企図が支配する」(内堀他 34) 現代社会において、大抵の人間は日常の営みに忙殺され、それを意識することはほとんどない。自分だけはま

るで永遠に死なない存在であるかのような錯覚に陥ったまま日々をやり過ごしているのだ。

山折哲雄氏が島田裕巳氏との対談の中で、日本人は死をタブー視する傾向があるとして、それを象徴する現象の一つに、文部科学省の「生きる力」のみの重視を挙げている。

ひとつは、文部科学省が文部省の時代からずっと教育上の最大のスローガンにしてきたのが「いきる力」を重視するということ。「生きる力」一本槍でやってきた。僕は文科省のいろんな委員会に出ると、必ずいうのは、「生きる力」、それはそれで結構なことです。しかしもうひとつ、死を受け入れる心の教育が必要だと。そういう死の問題が明らかになってこそ、生きることの尊さがわかる。ありがたさが心にしみ入る。

しかしこれが、何度いってもダメなんですね。「生きる力」一本槍にしがみついている。死に関する問題、これを教育の世界にもち込むことがタブー視されている。公教育の場ではそれがままならない。私立も全部右へならい……。どこに行っても「生きる力」の合唱です。とにかく、そういう委員会の場ではいろんな分野の専門家が出席しているんだけど、この「死」の問題が話に出ると、かならず異を唱える人物が大きな声で発言する。それでその問題が悩ましい問題として見送られてしまう。そのくり返しだったような気がするね。これは文科省もどうすることもできない。根本的には日本人の問題なんだね。(76 - 77)

文科省の委員会に出席したことのある山折氏の実感が直截的に語られているが、「生」を考えるのに、死の問題は無視できないにもかかわらず、日本人はそれをタブー視する傾向があるということを訴えている。

同様の主張を柏木哲夫氏は1993年の段階で既に、『『死の教育』が『生の教育』に』というタイトルの記事を『朝日新聞』の論壇に載せ、次のように訴えていた。

戦後の日本人は強さと生産性に価値を置いてきた。老いや死はその対極に存在する。従って老いや死を避けて通りたい、考えないようにしたいという風潮があるように思えてならない。

この世に生を受けた者はだれ一人として死をまぬがれることはできない。死はまさに現実なのである。それならば避けないでしっかりと見つめる必要があるのではなからうか。

死の教育の必要性を痛感している。[……] 死が日常生活から姿を消せば消すほど死の教育が必要になる。[……] 日本においては死の教育はほとんどなされていないのが現状である。[……]

死の教育は生の教育につながるものである。死を現実のものとしてしっかりと見つめる教育から、それではどのように生きるべきかという生の教育が始まるのである。(5月12日)

両氏とも、現代日本社会において——死の現場が日常生活から病院に移り、またコンピュータや映像技術の発達ゆえに死がヴァーチャル・リアリティとなり、死は確実に現実のものではなくなりつつある現代社会において——生について考えるためには、むしろ死の教育が必要であること訴えている。

死がタブー視され、同時に「日常生活から姿を消」しつつある中、滝田洋二郎監督の日本映画『おくりびと』が2008年に封切されたことの意義は大きいだろう。死が前景化された話題の作品であるこの映画は、世界にも発信され、とりわけ欧米社会でも反響を呼び、第32回モントリオール世界映画祭のコンペティション部門でグランプリを、また第81回米国アカデミー賞外国語映画賞をはじめ、多くの賞を受賞したが、死の問題と対峙することを世界に直接的に訴えかけた意義は大きいといえるだろう。

イギリスの文学者の中でD・H・ロレンス（Lawrence）といえば一般的には性あるいは生に根差し、生命力を謳歌した作家・詩人ということで知られている。実際「ハーディー研究」（“Study of Thomas Hardy”）を書いていた頃は「生きるということは単に死んでいないというだけではない。それこそが唯一の真正なることであり、すべての生命体の目的であり究極の目標である」（428）と、真に生きるとはどういうことなのかを問いかけ、「糸杉」（“Cypresses”）の詩の中でも「唯一邪悪なことがある。それは生命を否定すること」（298）だと謳っていた。更には「ベストウッドへの帰還」（“Return to Bestwood”）の中で「わたしがあがき求めているものは生命である」（264）、「わたしには、今の生命の考え方がまったく間違っていることが分かっている。生きるということがどんな意味を持つのかについて新しい考え方をする用意がなければならない」（265）と訴え、最後のエッセイ『黙示録』（*Apocalypse*）においては次のように謳っている。

人が本当に情熱的に求めているのは、彼自身の「魂」の孤立した救済などではなく、生き活きとした全体性であり、生き活きとした調和なのである。人が求めているのは、肉体を持っている人間が力を発揮できるのは、今という1回きり、1回だけなのだから、彼が求めるのは、まず何といっても肉体的な成就なのだ。人間にとってこの上ない驚異は生きているということなのだ。花や獣、そして鳥にとっても同様、人間にとって至上の勝利はこの上なく生き活きと、この上なく完璧に生きているということなのである。（125）

以上、見てきたようにロレンスには、殊更「生命」に比重を置いた言説が多く見られる。彼のこのような側面に光を当てれば、H・T・ムア（Moore）に倣って、「愛の司祭」¹ならぬ「生命の司祭」——生命の大切さを説く司祭——という異名をさえロレンスに献呈したくなる。J・C・コウアン

(Cowan) も「ロレンスの作品の繰り返されるテーマは生命の『核心』である」(255) と述べている。

このように、生に徹底的にこだわったロレンスであるが、彼が死とどのようにかかわったのかという問題については、最近では D・エリス (Ellis) をはじめとする伝記作家がロレンスの病や死について詳しく取り上げることはあっても、批評家がそれらに殊更関心を示すことはなかった。そこで本稿では、まず、ロレンスが若い頃から、とりわけ後半生において、生のみならず「至上の超越者」(内堀他 21) ともいうべき死にいかに取り憑かれ、死の問題と対峙してきたか——彼が生きた当時の社会や彼自身の「死」との遭遇体験——をざっと見ていき、彼が死に対する想いをどのように表現しているのかを、主に中・後期の随筆等——とりわけ「平安の実相」(“The Reality of Peace”)、^{さえず}「小鳥の囀り」(“Whistling of Birds”)そして「エトルリアの遺跡」(“Etruscan Places”)を中心に——検証する。その過程を通じて、エトルリアの遺跡巡りがロレンスの死生観に与えた影響がいかにか大きかったかが明らかとなるだろう。本稿の目的は、これらの作業を通じて、「生命の司祭」としてのロレンスの一般的なイメージを大きく覆すと同時に、生命の充実や謳歌には、死との対峙、その理解と受容がなくてはならないという人間の真実に改めて目を向けることにある。

第1章 死の体験と負の感情の表出

ロレンスが生を受けた 19 世紀末から 20 世紀にかけて、イギリスにおける死の受容はいかなる状況にあったのだろうか。内堀基光、山下晋司両氏が当時の西欧の社会、とりわけイギリスの状況について次のように説明をしている。

社会という舞台からのこのような死の追放は、西欧においては一九世紀後半の近代社会の成熟と整備の中で徐々に進行していった。この過程は西欧においては性が解放されていった過程と裏腹の関係にあり [……]、アリエスの死の社会史的研究にインスピレーションを与えたジェフリー・ゴースが「死のポルノグラフィ化」と呼んだものである ([……])。つまり、性が生と結びついて、近代の前進する時間の中でプラス価値を獲得していったぶんだけ、近代の時間意識になじまない死は、かつての性のように、人々の前から忌み隠される存在になっていったのである。こうして、とくにイギリスでは、人前で死について語ることさえタブーとなり、人は締め切った部屋のなかでただ一人死者を悼むということになった。(324)

死がますます忌み嫌われるものとなりつつあった当時のイギリスに生を受けたロレンスは、1901 年、兄ウィリアム・アーネストの死を経験し、その直後に 16 歳の彼自身も肺炎に罹ってしまう。それ以来、

気管支系の病に頻繁に悩まされるようになるが、以後のロレンス自身の肉体の不調については後で触れることにして、ここでは更にロレンスに大きな衝撃を与えたこととして、1910年12月の母親リディアの死を挙げたい。それは彼自身が語っている通り、死というものの存在をより強烈に実感させることになる（「スケッチ風自伝」“Autobiographical Sketch”301 参照）。また、1914年から始まった第一次世界大戦の戦況下、多くの人間の死を目の当たりにし、死の現実を更に意識することを余儀なくされた。

大戦末期の1918年の冬から19年にかけてヨーロッパとアメリカで猛威をふるったインフルエンザ（「スペイン風邪」）のことも忘れてはならないだろう。またたく間に世界中に蔓延^{まんえん}して、2500万の人命を奪うに至ったという（井上義夫 7）。多くの死者を出し、社会に甚大な打撃を与えたインフルエンザの流行により、ロレンスもまた友人達の死を経験することになる。「友人達の相次ぐ死が、ロレンス自身の未来をも覚束ない光で照し出した」（8－9）とは、井上義夫氏の言葉であった。ロレンス自身の肉体に目を転じてみても、友人達の命を奪ったスペイン風邪は彼をも蝕^{むしば}んでいくのだった。彼がそれに罹ったことは、12月20日（1918）付けのマンズフィールド宛の書簡に初めて記され（*The Letters of D.H. Lawrence III* 309）、その後3月中旬まで、病みついたまま歩くこともできなかったという（326－37）。

この時期におけるロレンスの死に関する議論を見ておこう。『恋する女たち』において既に死についての議論をロレンスは展開しており、寺田建比古氏が詳しく論じているが、この時期の議論において死は、氏がいう「実存的、宗教的な意味関聯において使用される」言葉に過ぎず、肉体の死は「この実存在的な意味における死とは本来無関係」（585）だった感は否めない。死を受け入れよとロレンスがいう時、それは、死のような破壊経験を受け入れよというように、比喩的・実存在的な意味で用いることが多かったのである。

また「平安の実相」の中でも議論の展開が見られる。とりわけ注目すべきは、全般的には死を「腐敗の流れ」や「崩壊の欲望」といった抽象的、精神的な破壊経験として肯定的に捉え、その必要性を説いてはいるものの、時に例えば一章において物質的な肉体の死を論じている点である。しかしこの段階ではロレンスは、生と死をはっきりと二元的なものとし、死を否定的に捉えている。²

エンペドクレスは「……」急いで死へ跳び込んだのだ。「……」みんないずれは死ななければならないのだから。「……」いついかなる時にも、われわれの目の前には死の扉があり、いかなる道をたどろうと、いずれはその扉に行き着くのだ。つまり割り当てられた期間が終われば死ななければならない、その点では選択の自由はまったくない。「……」平安は生を受け入れる時に訪れる。死を受け入れる時にやってくるのは、平安と等価値ではあるが希望のないもの、静止であり、断念である。（673－74）

このように、この時期ロレンスは、死を「静止」や「断念」と結び付け、否定的な捉え方をしていた。³

「蛇」(“Snake”)は、1920年から1921年にかけてタオルミーナのフォンタナ・ヴェッキア滞在中に、実際に経験した蛇との遭遇をロレンスが謳った有名な詩であるが(『完全版D・H・ロレンス詩集』*The Complete Poems of D.H.Lawrence* 998)、⁴ この詩の中にも死に対する否定的な恐怖の思いが吐露されている。詩の中で詩人が蛇に対して感じる「恐怖」の気持ちが一体何に由来するのかについては、筆者は拙論の中で既に議論をした⁵ ため、ここでは詳しく論じないが、議論の要旨を以下に記しておこう。論の目的は、詩人の恐怖の対象が性、あるいは性行為であるとする従来の批評家たちの指摘(セイガー Sagar 236 参照)に新たな視点を導入することにあった。つまり、詩の中で蛇の毒への言及があり、そのために蛇を殺さなくてはならないとっているからには、毒の喚起する死に対する恐怖に襲われているといってもあながち牽強付会ではないのである。また、何よりも戦争やスペイン風邪の流行など、当時の社会状況や、彼の周囲の人間の死や彼自身の個人的な体調不良のことなどを考慮に入れても、当時、彼の眼前に死は確実に鎌首をもたげてきていたのであり、毒ゆえに咬まれれば死を余儀なくされる可能性のある蛇を死の表象として殊更取り扱ったとしても何の不思議もない。

そもそも人はどうして死を恐れるのだろうか。この問題について佐々木馨氏の言葉を紐解こう。

古来から、誰にとっても死は未知であり不安であるがゆえに、恐怖の対象であった。それゆえ「自分に限って死ぬことは絶対にありえない」と思い、かつ思いたいとしてきた。しかし、死はハイデガーが言うように、確実に私たち一人ひとりに訪れる。それを誰かに代わってもらうことはできない。しっかりと引き受けなければならない。

現代は医療技術が高度に進歩し、現実の死が見えにくくなっている。現代は死を否定しようとしている時代であるとさえ言われる。見えにくくなったぶん、逆に死は恐ろしく見えるのかも知れない。(120)

未知であるから、不安であるから人は死に対する恐怖を持たずにはいられない存在なのだという。⁶ 確かに死そのものを経験して戻って来られた人間が存在しないのであるから、生者が死を理解することなどできるはずはない。臨死体験の可能性はあるかもしれない。しかしそれはあくまで臨死であって、死そのものではない。だからこそ人は、他者の死を通して様々な死体験を、死後世界を想像し、語り継いできたのだ。⁷

死が「しっかりと引き受けなければならない」ものであるからには、恐怖心を少しでも和らげるために、またそれを克服するために、人は何とか死を理解し、受容しようと努力を重ねてきた。哲

学者や宗教家は「死」を理解するためにこれまで様々な説を提示してきたのであり、中でもキリスト教徒たちは倫理的な天国と地獄の概念を導入したのだ（仏教徒たちは極楽と地獄の概念を生み出した）。

対象を知らずしてその受容はあり得ない。ロレンスも「平安と実相」を書く段階で、死を理解する必要性を既に訴えていた。

人間は理解したものなら乗り越えることができる。自分の究極的存在は死の中にあることを理解すれば、われわれは新しい存在へと変容する。[……]

しかし皆がみな、理解力を備えているわけではない。[……] しかしわずかの者は、死を見事に乗り越えるために、これまで続いてきた死の状態を理解することがどうしても必要なのだ。(676)⁸

この段階でロレンスのいう「死の理解」とは、寺田氏も述べる通り、その大部分が実存的、抽象的な破壊作用としての死の理解の域を越えてはいなかっただろう。しかし、少なくとも彼がこの時期に「死」という用語を用い、それを理解する必要性を論じている事実は注目に値する。

ここで目を向けるべきは、「蛇」の中の「アホウドリのことを思った」(351)という意味深長な言葉である。それは詩の中で突然出てくる表現であるが、S・T・コールリッジの『老水夫行』の中で登場するアホウドリへの言及であることはK・セイガーの指摘(237)を待つまでもない。アホウドリにまつわる『老水夫行』のメッセージは、すべての生き物があるがままの存在として認めよ、ということだったが、それはそのまま「蛇」のメッセージに敷衍することができるだろう。つまり、蛇の存在がすべての生き物と同様、自然界において重要な一員であることを認める必要があるように、蛇の象徴するもの——性や死——もまた生ある存在にとっては重要な様式であり、認めなくてはならないということである。詩のテーマは一つには、性も死も含んだ「生命の王者」としての蛇の存在を認めることの必要性であるといえるだろう。

性や死は「生命^{ライフ}」という、より大きな概念に包摂されているのだ。⁹「蛇」において、性や死に対する恐怖や忌避感といった負の感情は未だ完全には克服できていない。しかしロレンスは、少なくともそれらを象徴する蛇に対して王と崇めるほどの畏怖の念を抱き始めているということ、同時に蛇を最終的に「生命の王者」と呼ぶことで、大きな概念としての「生命」の意味をこの段階で既に感じ取っていたということを確認しておこう。¹⁰「蛇」以前にももちろん死を認めることの必要性は論じてはいるものの、このように、死を大きな意味での生命の中に相対化し、それに肯定的な意味を見出し、それを認めることの必要性を明言している点で「蛇」の意義は大きい。¹¹

引き続き、その後のロレンスを見ていこう。彼が罹ったインフルエンザはもちろん厳しい状況をもたらしたが、更にセイロンへ向かうためにタオルミーナを発つ前にも彼は風邪で寝込んでいる。

1922年にセイロンへ行きペラヘラ祭を見学したロレンスであったが、井上義夫氏が指摘するように「高温多湿のモンスーン」の気候が彼の身体に合うはずがなかった（172 参照）。

その後、1924年8月2日頃に咯血し寝込んでしまうが（井上義夫 277）、そのような状態にあってもロレンスの放浪癖は止むことはなく、ホピ族の蛇踊りの見物にまで出かけている。やがて1924年に執筆される「ホピ族の蛇踊り」（“The Hopi Snake Dance”）において、蛇は大地の奥深くに存在する「暗黒の太陽」の「生と死のメッセンジャー」として強調されることになる。その蛇の毒をものともしないホピ族のインディアンたちの様子はロレンスに衝撃と畏怖の念さえ与えることになる。この随筆の中で書かれる「征服しなくてはならない」「恐怖」とは、一つには蛇の「毒」に対する恐怖であり、まさに死に対する恐怖だといえるだろう（87 参照）。蛇の毒を克服してこそ【アメリカ・】インディアンたちは生命力溢れる生を営むことができるというわけである。もっとも、この時点でもロレンスはインディアンたちとの間に溝を感じ取っており、未だ彼らの原理を自分のものにはできず、葛藤が続いている点を忘れてはならない。

1924年9月10日に78歳の生涯を終えた父親の死もまたロレンスに特別な思いを抱かせることになっただろう。父の死を経験したロレンスにも死期は近づいていたのであり、1925年40歳の時にはマラリアに倒れ「難局」を経験し（『書簡集 V』 *The Letters of D.H. Lawrence V* 210）、その後も常に病に煩わされる人生だった。エリスも指摘するように、1920年代後半において死はロレンスにとってますます彼の心を占有する重要な問題になっていった（63）。

ロレンスが死に対して恐怖心や不安感を抱く理由は、先に見てきたように未知であるが故に不安を掻き立てられるということ以外にも要因はあっただろう。確かに、ギリシア・ローマ神話にも造詣が深く、しかもエドウィン・アーノルドの『アジアの光』に影響を受けたロレンスは、異教的、また仏教的な死生観を早い時期から吸収していた。母親の死を経験したロレンスが妹エイダに送った書簡（1911年4月9日付）はまさにそれを物語っている（*The Letters of D.H. Lawrence I* 255 – 56）。とはいうものの、幼い頃からキリスト教徒として育てられたロレンスにとって、キリスト教との強烈的な宗教的葛藤を繰り返し、それを否定することになろうとも、いくつかの要素は彼の身にしっかりと刻み込まれているのだ。¹² とりわけ生死を全く別の次元で捉えるキリスト教の二元論的死生観、¹³ しかも天国と地獄といった善悪の二元論的概念については、後で触れるように、エトルリアの旅を記した紀行文の中でさえ言及しているのである。彼はその死生観に囚われ、それが故に不安感を徒らに掻き立てられていたともいえる。

背後に死が着実に忍び寄る状況の中で、こういったキリスト教的な死生観だけでロレンスが納得できるはずはなかった。死に対する不安や恐怖心、生に対する執着が、より深刻味を増していたに違いない時期、ある意味、死に取り憑かれていたといっても過言ではない時期にエトルリアの遺跡の存在を知ったロレンスは、同時期に書かれた「糸杉」という詩の中で神秘に包まれたエトルリア

に対する関心を露にしていくな。

第2章 エトルリア体験

(1) 表層から深層へ

本章ではロレンスのエトルリア体験を追いつつ、古代エトルリア的死生観が彼の死の理解にいか

に影響を与えたのかを見ていくことにする。エトルリア人は「紀元前7世紀から紀元前6世紀にか

けて、地中海全域でもっとも富み栄えた民族であった」（青柳 1）と考えられている。「最近のエ

トルリア学（エトルスコロギア）の発達によって、多くの謎が解決され、もはや「謎のエトルリア文化」

という名称で呼ぶことができなくなっている」とはいうものの、「文字資料が少なく、エトルリア

人自身が書いた文献資料は皆無」であることから、ギリシア・ローマ文化とは大きく異なり、今も

なお「謎」の要素が残っている（青柳 4）。

ロレンスが「蛇」を書いていた1920年頃に既に神秘に包まれたエトルリア（人）に関心を持っ

ていたことは既に触れた通りである。実際に彼が行動に移したのは、1926年3月だった。彼はペルー

ジャにある国立民族博物館を訪れ、エトルリアの壺などを見る経験をしている。その時「本能的に

惹かれ」るものを感じ取り「一瞬のうちに共感を得る」ことのできるロレンスではあったが（97）、

博物館の展示は彼にとって所詮、間接接触に過ぎなかった。彼は博物館について次のように不平を

こぼす。

[……] これは叶わぬ願いであるが、これらの陳列物を、それぞれの置かれていた場所から無理

に引き離して運んで来るなどということがなければ、どれほどよいだろう。博物館というものに

は、どこかが間違っていると感ぜられるところがある。（「エトルリアの遺跡」124）

もともとあった場所から博物館へと持ち運ばれ陳列された単なる「もの」を見ても、それは手折ら

れた花と同様、生命を奪われたものを表層的に知得するだけのことなのだ（215参照）。博物館のお

かげでエトルリアへの思いは触発されたものの、博物館はロレンスにとって、結局、直接触れ合え

る場ではない。博物館とは「考古学者たちの論拠が薄弱な学説を例証するためにでっち上げられた

数々の実物教育なるものによって、一定不変の秩序などないもの、また一つの秩序に組み入れられ

ることを拒否しているものを、無理に整序し一定不変の秩序に組み入れようとする狂人じみた様々

な試み」（214）がなされている場に過ぎず、そこで得られる経験は体系化された表層の実物教育に

過ぎないというのである。¹⁴

ここでロレンスが様々な機会に「触れ合い」の必要性を論じていた¹⁵ことを想起することは無駄

ではないだろう。彼は対象をより良く理解する方法としても「触れ合い」による方法を重要視する。とりわけ彼はそれをユニークな比喩^{ひゆ}を用いて説明している。地球をボンボン菓子に、旅行者を蠅^はに譬^{たと}えた、現代の「表層的な」旅行者批判の文章である。ロレンスによると、現代にあって旅行者は「ボンボンを丁寧に包み込んでいる透き通ったきれいなセロファンの上をはい回る蠅」に過ぎず、ボンボンそのものに直接触れることが——その土地の醍醐味を味わうことが——できなくなっているという（「ニューメキシコ」“New Mexico”141）。旅人は蠅のように表層を動き回るだけでは意味がなく、蛇のように大地に直接触れ、その内部にまで入り込み想像力を駆使する必要があるのだ。

エトルリアの遺跡が何たるかを知るためには、その場に行き、蛇のようにその内奥にまで踏み込み、その場に直接触れる必要がある。そう考えると博物館でのエトルリア経験は、確かにロレンスにとってセロファン上の蠅のように、抽象的にエトルリア人たちのことを、とりわけ彼らの死生観を理解しようとする行為に過ぎなかった。故にロレンスは、死の直接経験とまではいかなくとも、想像力をたくましくすることで、その擬似体験をするために、アセチレンランプの灯火を手にした案内人の後からウサギの巣穴のようなエトルリアの地下墓室へと降りていく（134、138、194 参照）。A・ハックスレー（Huxley）が「ロレンスの天賦の資質」だと評したもの、すなわち「存在の、一般には知られざる神秘の様相に対する異常に鋭敏な感受性」（xi）を携えて、ロレンスは地下世界の墓穴の中へと入っていくのだった。それはまさに彼が「人生の最後の局面」、つまり「象徴的死ではなく、現実の死が間近に迫ってきた時期」（セイガー 303）のことだった。

次節では「パヴァリアのりんどう」に謳われる詩人のように、勇気を奮い起して、墓穴の死の世界へ降りていくことでロレンスが体得した死生観とはどのようなものだったのかを見ていくことにする。

（2）死の受容

「現実の、生き生きとした生命の触れ合い」（「エトルリアの遺跡」 215）を太古のエトルリア人たちとの間に求めて、ロレンスはエトルリアの地を訪れた。それは、「現代社会とは対照的な社会であり、すべての生あるものは触れ合いを通じて一つに統合される、本物の繋がりというものを持った理想郷^{ラーナニム}」（コウアン 137）ともいべき土地であった。チェルヴェテリ、ヴルチ、ヴォルテラと、それぞれに特徴を持ち、ロレンスに感銘を与えたエトルリアの遺跡群であるが、本稿で特に焦点を当てたいのは、「往昔はエトルリアの首都」、「大エトルリア同盟の中心都市であった」（120）タルクィニアである。

12の都市国家の中では、最古の、そしてまた盟主であると考えられていた町タルクィニア（178 参照）。どうしてロレンスはとりわけその場の墳墓を見て感動したのだろう。井上義夫氏は「彩色古墳群」にその原因を見る（342 - 44 参照）。一つには、既に触れた「触れ合い」の感触をその場

所で見た絵画から得られたからだろう。ロレンスは次のように感じ取っている。

エトルリアの絵には、まさしくこの触感があるのだ、人々も動物たちもみな、本当に触れ合っているのだ。触れ合っている感じ、これは実に最も類い稀なる性質の一つである[……。]。不器用に撫ぜたり、掴んだりすることは、いくらでもある。しかし本当に触れ合っているわけではないのだ。特に絵の世界を見ると、人々はいかにも触れ合っているかに見える、抱き合ったり、互いに相手の体に手を置いたりして[……。]。[……。] ここには、この色あせたエトルリアの絵の中には、静かな触れ合いの流れがあって、あの長椅子の上の男と女とを一つに結びつけている。あの後ろの、はにかんでいる少年を、鼻を上げているあの犬をも、いや壁から垂れ下がっているあの花輪をすら結びつけ、一つにしている。(「エトルリアの遺跡」143; 149 も参照)

また、より重要なのは、その墳墓からまさに「生の世界」を感じとることができたからである。最初に入った「狩りと漁り^{すなど}の墓」では「霧のかかった空と海に鳥が飛び、魚が跳ね、小さな男たちが狩りをしたり釣りをしたり、小舟をこぐ」姿が見えてくる(132)。「ここにこそ本当のエトルリア的な快活さと自然さ」があった(133)。壁画に描かれている死後の世界は、まさに生の世界と同様の世界だったのだ。

壁画の中の跳躍するイルカのすがすがしい姿がロレンスの眼前に立ち現れる。もともとロレンスは生と死の二つの世界を行き来する存在としては蛇の虜になっていたが、本紀行文において生死の二つの世界(すなわち海[死]と大気[生]の世界)を行き来する存在としてロレンスの想像力をより刺激したのは、開放感溢れるイルカだった(142、151 参照)。壁画の跳躍するイルカの姿からは、蛇によって引き起こされる死の恐怖は全く感じられない。

別の壁画には死者が宴会を開いている光景が描かれている。「宴会用の長椅子に片肘^{ひじ}をついて寄りかかる」死者の男も、「見事な衣装を身にまとい宝石で飾られた美しい貴婦人」も、みな死者であるにもかかわらず、生者同様、陽気に葡萄酒を飲み、語らい楽しんでいる(133 参照)。死者たちの黄泉^{よみ}の国での宴の様子を記したロレンスの言葉を紐解いてみよう。

これは死の送葬の宴なのだ。同時にこれは、死者が下界で、黄泉の国で開いている宴でもあるのだ。なぜなら、エトルリア人たちが往く黄泉の国は、楽しいところだったからだ。生者が戸外で楽しい祝宴を開いている時、同時に、死者の墓でも死者自身が、同じように祝宴を開いていたのである。傍らに貴婦人が侍して彼に花輪を捧げ、奴隷たちは彼に紫の酒を運んでいたのである、はるかなる黄泉の国で。地上の生活が非常に楽しくいいものであったからには、下界の生活もその続きとなるより他はなかったからだ。(133 - 34)

このように、生者と死者の世界が断絶した別世界ではなく、繋がった「続き」の世界であり、そこは楽しいところだというメッセージを壁画が伝えている。

遺跡に実際に行き、直接壁画に触れ、古人の生命力溢れた死後世界の描写に触れたことで、ロレンスの想像力は大いに掻き立てられることになる。死を『『新しい世界の出発』』と思える人は、まだ続きがあるのでそう恐怖はない」(126 参照)と佐々木氏はいう。「狩りと漁りの墓」をはじめ「豹の墓」、「バッカスの巫女の墓」など、多くの墓を擁するタルクィニアを中心とするエトルリア人たちの死生観の発想——死後世界は生の世界と隣り合わせであり、生の世界と同様、楽しい世界と捉える発想——を壁画に見出し、それを直に体験したロレンスは、徒に死を恐れることの意味を、そして生と死の間に断絶的な境界を設けることの意味を、問い直したに違いない。

ロレンスはもともと生と死を「まったく両立しない」(「小鳥の囀り」5) 分断された別世界の様式と捉えていた。

死と生命が、まったく両立しないということは、不思議なことである。死が支配する間は、生命を見つけ出せない。死一色であり、一つの圧倒的な洪水である。そしてそれから、新しい潮が起こる。それが生命というものであり、銀色の至福の泉である。どちらか一方である。生命に与するか、死に与するかどちらかなのである。われわれの本質の中で、その両方が同時にあることは決してない。

死がわれわれを捉え、すべてが赤裸に剥ぎ取られて暗闇へと消え去る。生命が立ち上がり、われわれは、奔流となって花開く、ほのかなすばらしい銀のほとばしりとなる。生のすべては、死のすべてと相容れない。[……] 死の王国には銀鈴の歌はないのである。しかし、生命のあるところにも、死はないのだ。死などは、まったくありはしない。ただ、銀色の完全な喜び、つまり別の世界の存在だけがある。(5)

そして生と死の「説明不可能な異質性」(6)を感じ取るロレンスであった。しかし、エトルリア人たちの陽気な地下世界を体験したロレンスにとって、黄泉の世界をこの世と同様楽しい世界と捉える彼らの死後世界の方が「午後の光り明るい地上の世界よりもさらに現実味を帯びたものになっていく」(「エトルリア遺跡」138)。

エトルリアの遺跡の中には、「オルクスの墓」のように、時代を経てギリシアやローマの影響を受けたことにより、死後世界を「陰惨な冥府、地獄と煉獄」とみる世界観が描かれているところもなくはない(174 参照)。¹⁶ 実際「オルクスの墓」から受けた印象をロレンスは次のように論じている。

ぞっとするような下界の、地獄とその恐怖の描写が始まるのは「オルクス墓」からであり、かかる描写はあの恐ろしいローマ人がエトルリア人に与えた印象の反映であったことは確かである。[……] 馬鹿でかい不吉な地下の洞窟にとって代わられる、そしてかかる洞窟にふさわしく地獄が入ってくるのである。（「エトルリアの遺跡」174）

実際エトルリアの宗教は、このようにローマ人の懐疑思想が広がり始めると滅び始めた（150 参照）わけだが、ロレンスが共感し、心を奪われたのは、そのような懐疑思想が流布し出す前のエトルリア人たちの発想の豊かさ、それを基盤にした「古代人独自の死に関する哲学」（144）——偉大な自然宗教に基づいた、「来世の生活は驚異に満ちた生の旅の続きに外ならぬ」という哲学（174）——だったのである。

死はエトルリア人にとって、生の楽しい継続に外ならず、そこには宝石も葡萄酒もあり、舞踏のためにフルートが奏でられる世界であった。死はけっして至福の恍惚境、天国ではなく、また煉獄くげんの苦患でもなかった。それは満ち溢れる豊饒な生が、自然にそのまま続いている世界に外ならなかった。すべてのものが、生を、生きて在る喜びを表現していた。（109）

このような死後世界との出会いの後、死に対するロレンスの恐怖心は、D・キャヴィッチ（Cavitch）が次の引用で述べるように、確実に緩和されていったことだろう。¹⁷

メキシコのアステカ族のグロテスクで記念碑的な芸術に晒された後、エトルリア人たちの憤り深く穏やかな喜びの表現に接したことで、ロレンスは本当に安堵感を覚えたことだろう。自身の死に対する畏れの気持ちを一層強くさせるだけだったインディアンインディアンの死に対する畏れから目をそらしたロレンスは、自分たちの肉体的存在に満足することに没頭するエトルリア人たちによって癒されるのだった。彼らは自分たちの存在が一時的であることに対して、いかなる恐怖も苦痛も感じていなかった。（208）

現代人の性さがとして、エトルリア人たちが本当に「いかなる恐怖も苦痛も感じていなかった」かどうかを疑いたくなるかもしれないが、ここではこの点について深くは追究しない。少なくとも彼らの残した芸術作品には恐怖の片鱗さえうかがえないという事実を受け入れることにしよう。

もともと持っていた死生観——死の状態と生の状態を断絶した二元論の様式と捉える死生観、また死後世界を人間の価値観の入った善悪二元で捉える死生観——をすべて払拭することはできないまでも、ロレンスは死後世界を怖い場所ではなく、生きている世界と地続きのものとして捉える古

代エトルリア人たちの死生観を知ること、確実に「癒され」ていく。

筆者はこれまでロレンス文学において特別の役割を果たしている蛇の象徴¹⁸を分析することで、作品をより詩的に、総合的、神話的、詩的に読むことの可能性を追究してきたが、「エトルリアの遺跡」におけるロレンスの蛇の表象の扱いと、それ以前のものと相違にこだわることで、彼の死生観の変化を読み取ることができるだろう。本論で見てきただけでも蛇は「生の王者」、「性」や「死」の象徴として扱われていた。¹⁹「エトルリアの遺跡」の中で蛇はどのように表象されているだろうか。「生命を与えてくれると同時に、生命を奪いもし」、「豊かな実りを産む面に劣らず、恐ろしい破壊の面もある」（207）と強調される大地の諸力を具現するものとして蛇は描かれ、とりわけ生命力の方が強調されている点にまず注目しよう。ロレンスは蛇を「大地の奥にある様々な生命力、火山や地震を生ぜしめるような力ばかりではなく、様々な植物の根を馳せ上って、あの木、生命の木の偉大な幹を形成せしめ、また人間の足から脚へと馳せあがって、心の臓を、即ち心を創り成す生命力を象徴するもの」と表現している。²⁰

しかし本稿で着目したいのは「エトルリアの遺跡」のとりわけ壁画に描かれている蛇の形象である。壁画にはイルカや魚、鳥、ライオン、鹿、アヒル、羊、牛、豹、鶉、犬、山羊など、実に様々な生き物が描かれており、単体で描かれるそれら生き物の多様性だけでも目を見張るものがあるが、中でもロレンスが特に関心を寄せるのが、複数の生き物の合体した複合動物だという事実は注目に値する。蛇がその要素に含まれるキマイラ（164）²¹やタイフォン（171）²²をはじめ、スフィンクス（164、194）、グリフィン（194）、ヒッポカンプス（海馬）（143）、ケンタウロスなど、枚挙に遑ないである。これら複合動物の存在は、いかなる意義を持っているのだろうか。ロレンスは次のように分析する。

エトルリア人にとって人間とは、その人間の持つ様々な異なる性質や力ゆえに、牡牛であり、牡羊であり、ライオンであり、あるいは鹿でもあるといえる。人間はその血管の中に、翼ある鳥たちの血を持ち、また蛇の毒を持つ。すべてのものはそういう血の流れから出現したのであり、従って、この血縁関係は、それがどのように複雑で両立できない関係にあったとしても、決して断ち切られることはなく、また忘れられることもなかった。（165）

複合動物はこのように、ロレンスの想像力を刺激し、様々な生き物の象徴する要素を内に包含している人間の複雑さ、あるいは多様性を伝えた。とりわけロレンスが執着してきた蛇の表象に関していえば、それが複合動物の一部になっているということは、蛇の要素も全体の一部に相対化されるということになる。具体的には「蛇の毒」が象徴する死も、より大いなる意味での「生命」体の一局面に相対化されうることである。死は「生命の輪」の中であって絶対化の呪縛から解放放

たれるのであった。ロレンスは次のようにも論じる。

全世界が一つの生きものであることを、私たちはただ象徴的にしか知ることができない。更にいえば、どの意識も——ライオンの憤怒であろうが蛇の怨毒であろうが——すべて存在するものであり、存在するが故に神聖なのである。一切は切れ目のない生命の輪から生ずる。その生命には核が、胚種が、唯一者が、もし神と呼びたいならまさにその神が内在している。そして人間も、それぞれの靈魂とそれぞれの個性を持って生れ出るのであるが、人間以外の一切のものと永遠に結ばれている。血の流れは一つで同じなのだ。(168; 傍点筆者)

かくしてロレンスは、蛇の毒が象徴する「死」という現象は確かに「生命体の現実」ではあるものの、同時に生命体の一様相に過ぎないということ、個体の死もまた「生命の輪」の中に存し、人間は他の生命体全てと繋がっているという、いわば生命輪廻の考えにも思いを馳せるようになっていくのである。²³

もっともロレンスの達した死生観は、いわゆる人間の肉体が朽ち果てた後、自然に還るといったエコロジ的死生観ではない。確かに先に触れた妹エイダへの書簡の中には1911年という早い段階であるにもかかわらず、「僕たちは、死ぬ時に、降った雨の滴が再び海に戻るように、僕たちが神と呼んでいるこの非有機体の生命の巨大な光る海に、戻っていくのです。僕たちは個人としては見失われますが、全体として配慮されているのです。」(*The Letters I* 256)といったエコロジ的表現が見られる。また「無意識の幻想」(“*Fantasia of the Unconscious*”)の中でも「自然に還る」という発想を一旦は紹介し、次の文明へと繋いでいく必要性を論じたりもしているのである(180)。しかし注目すべきは、最終的にロレンスは「お互いに相対的な関係を保つ個々の生きた生物」の「絶対性」(182)の主張に終わっている点である。従ってそれは、他の生き物に生まれ変わるという輪廻転生思想そのものでもない。ロレンスにとっては、個体が死んでも消え失せることのない魂こそが大事だったのであり、²⁴ 更には自己の魂そのものが不死鳥のように復活すること、永遠に生き続けることこそが肝要だったので。²⁵ 地獄や天国の発想もなく、この世とあの世が繋がっているという死生観、そして靈魂の蘇り、あるいは魂の往来という時、それはまさにエトルリアの死生観そのものである。ロレンスは最後には不死鳥のような魂の復活を信じて、「エトルリアの例にならい」、「地下の死後世界への魂の旅」(ロックウッド Lockwood 186)に出るために、「小さなブロンズ色の死の舟」(「エトルリアの遺跡」 107)をこぎ出す準備を始めるのだった。

第3章 古代の人間の死生観

最後に、本論の趣旨からは少々逸れるが、古代エトルリアたちの死生観が古代日本人の死生観（一部は現代にも通じる）と似ている点を指摘しておきたい。「はじめに」で触れた映画『おくりびと』は、日本人の葬式のやり方や死者の弔い方に独特なものがあることも表面化させてくれた。死者との別れをするために納棺の儀式を執り行なったり、死者が1週間後、四十九日、百ヶ日、1年後、2年後（三回忌）……49年後（五十回忌）にこの世に戻ってくるという発想から法要を営んだり、命日、お彼岸、お盆といったように、1年間に何度もお墓参りをし、死者を供養する。

哲学者の梅原猛氏は、アイヌや沖縄の「あの世」観を手掛かりに、仏教伝来以前から日本人が持っていたと考えられる原「あの世」観について次のような説を立てている。

（一）あの世は、この世と全くアベコベの世界であるが、この世とあまり変わらない。あの世には、天国と地獄、あるいは極楽と地獄の区別もなく、従って死後の審判もない。（12）

（二）人が死ぬと魂は肉体を離れて、あの世に行って神になる。従って、ほとんどすべての人間は、死後あの世へ行き、あの世で待っている先祖の霊と一緒に暮らす。大変悪いことをした人間とか、この世に深い恨みを残している人間は、直ちにあの世へ行けませんが、遺族が霊能者を呼んで供養すれば、あの世へ行ける。（13）

（三）人間ばかりか、すべての生きるものには魂があり、死ねばその魂は肉体を離れてあの世へ行ける。特に、人間にとって大切な生き物は丁重にあの世へ送らねばならない。（15）

（四）あの世でしばらく滞在した魂は、やがてこの世へ帰ってくる。誕生とは、あの世の魂の再生にすぎない。このようにして、人間はおろか、すべての生きとし生けるものは、永遠の生死を繰り返す。（17）

このような「あの世」観——因果応報の思想も見られず、生と死の世界を断絶したものとはみなさない「あの世」観——は「縄文時代から続く『あの世』観であり」、多少の変形はあるにせよ、日本人は「仏教伝来以後も、そのような『あの世』観を持ち続けて、それが最近まで、いや現在になっても、まだ強く残っている」（23）と氏は主張する。更に比較宗教の必要性を説きつつ、「日本人のあの、原『あの世』観なるものは、人類の『あの世』観のごく原初的な形態であり、恐らくは、旧石器時代に形成されたものではないか」という「憶測」を次のように論じる。

私は、人類が「あの世」というものを考え始めた段階において、人類は飛躍的な知的進歩をしたと思いますが、今から何万年か前には、もうかなり精密な「あの世」観が出来上がっていたので

はないかと思っています。そして、そのような「あの世」観は、長い時間をかけて、人類共通のものになっていったのではないのでしょうか。

私が、日本人の原「あの世」観に、人類の原初的な「あの世」観の名残りを見るのは、そこに世界宗教といわれる都市文明の成立以後発展した宗教の「あの世」観と違って、天国と地獄、極楽と地獄の区別も、死後審判の思想も、因果応報の思想も認められないからです。まずあの世が成立し、そこに現世の人間の意志、あるいは願望が投影され、死後審判の思想や因果応報が加わり、果ては、天国と地獄、あるいは極楽と地獄の区別を生み出したに違いないのです。とすれば、日本人の原「あの世」観は、旧石器時代において全ての人類に共通な原初的な「あの世」観を色濃く残しているのではないかと思うのです。(49)

以上のような、「日本人の原『あの世』観」にも見られる「人類の原初的な『あの世』観」、つまり、死者を丁重に弔うという発想といい、生と死とは繋がっているという発想といい、これらが既に見てきた古代エトルリア人たちの死生観と酷似しているという事実——空間的に非常に離れた距離に存在する両地域に同様の死生観が見出せるという事実——は、まさに梅原氏の主張する「旧石器時代において全ての人類に共通な原初的な『あの世』観」の存在の可能性を一部支持する形になっている。

古代人に共通ともいえない死生観を具現化したものを今日にあって残しているエトルリアの遺跡に対してロレンスが早い時期から関心を持ち、1927年には実際にその地を訪れ、「エトルリアの遺跡」という紀行文を著したことは、古代人の「あの世」観が、今日でも人の心に訴えるということの証だろう。「はじめに」で触れた日本の『おくりびと』が既に触れた通り外国でも高く評価され受け入れられたのは、ロレンスがエトルリアの遺跡と出会い、その死生観を受け入れたことと同様なのかもしれない。エリスが指摘するように、制度あるいは体制としての教会が「最後の審判の恐怖」故に、今や死に行く人々の恐怖を必ずしも軽減することができないとするならば（ix-x参照）、古代人の「あの世」観を今一度注目する価値は大いにあるだろう。

むすび

以上見てきたように、歴史的、社会的には戦争の勃発や汎流行病の蔓延が、また、プライベートでは両親や知人の死を通じて、想像力の豊かなロレンスは死の擬似体験を繰り返していく。幼い頃から自分自身の身体が頻繁に病気に煩わされ、死の恐怖に晒されていったことも、死をより身近で現実的な問題と認識させたことだろう。とりわけ彼の後半生は死の意識化、それとの対峙を余儀な

くされる人生だったといえる。ロレンスの後半生の旅は、死との和解を求める旅だったといっても過言ではないだろう。

そのようなロレンスが梅原氏にいわせれば古代人に共通といっても良い死生観をもっていた古代エトルリア人たちの遺跡に触れることにより、その遺跡で死後世界を描いた壁画を見ることにより、彼の想像力は大いに刺激を受け、それまでもっていた自身のキリスト教的、二元論的善悪の死生観を徹底的に疑うことになる。エトルリア遺跡に対する関心は早い時期から示していたが、実際にその遺跡で——とりわけタルキニアの墓穴、そして壁画を前にして——死者が生前と同様に活き活きとしている死後世界を目の当たりにしたロレンスは、「深みの想像力」²⁶を駆使することにより、それまで捕らわれていた生死の「断絶的二元論」、あるいは天国と地獄の善悪の二元論的死後世界観を擁することの意義を問い直したに違いない。²⁷そして、死も生命現象の一部である可能性をロレンスは体得したのである。こうして、生死をいわばコインの表裏のように常に重なり合って存在するものと捉え、死後世界を生命溢れるものと捉えるエトルリア人たちの死生観の方がロレンスにとっては確実に現実味を帯びるようになる。セイガーもエトルリアの遺跡巡りの意義を次のように述べている。

彼〔ロレンス〕は長い遍歴を経て、遂にこれらの〔エトルリアの〕墓へとやってきた。そしてそれらの内に、ずっと探し求めていた活き活きとした人間の生命を、完璧な認識とつながりからなる生命というものを——肉体対精神、人間対非人間、生と死といった有害な二元論とは関わりのない生命というものを——見出したのだ。(309)

このように、遺跡巡りは「生の真実と死の真実」が「究極的には一つである」(ギルバート Gilbert 297) ことをロレンスに確信させた。それは、死を見据え、死をより大きな意味での「生命」の中に相対化する過程であったのだ。それこそが「蛇」を書いた頃には未だ逡巡の域を出ることのなかったロレンスが、ずっと求め続けていたことだったのだ。それは彼にとって大きな転換点となった。「蛇」で一つの転機を表出しつつも、依然として逡巡の中にあったロレンスにとってのエトルリア遺跡との出会いは、かくの如きであった。²⁸

ロレンスが「顕示された生命力を探し求めた」(ブルースター Brewster 13) という事実の裏に隠された別の真実を今一度強調しておこう。死を意識することを余儀なくされた人間の、死に対する恐怖と不安が潜んでいたという真実を。彼の後半生は、ある意味、死に取り憑^つかれた人生だったといっても良い。その恐怖、不安があったからこそ、死との対峙、死の理解、そして死の受容といった一連の過程の中で、ロレンスにとって「生命」はより輝いて見えたのだろう。ロレンスの最後を看取ったハックスレーも次のように述べていた。

彼が万象を見ているその目は、死と生の境界まで行って来た人、そしてその死の暗黒から浮かび出て来た時に、その人にとって森羅万象は、計り知れないほど美しくまた神秘的に現前してくる、そういう人間の目であったように私には思われた。ロレンスにとって、生存とは一種の回復期の連続に外ならなかった。その生涯を通じて、彼はあたかも、毎日毎日、死の病の底から新たに蘇生してくるかの如くであった。この回復期の目に、どんなものが映っているのか、それが、彼のどんなに何気ない片言隻句^{へんげんせきく}からも私たちに明かしてもらえるのだった。(xxx)

ロレンスは死を見据えて逝った作家・詩人だった。ロレンス文学は、常に死と向き合う作家の姿勢があったからこそ、我々読者にも生と真摯に向き合うことを要求するのである。「生命の司祭」という異名を冠することも可能なロレンスであるが、それは死をも含む大いなる「生命」、生的状況と死的状況を循環する生き物たちをすべて含む生命圏、あるいは自然界全体を含む大いなる「生命」の在り方を説く司祭であるといえよう。

黒澤明監督の『生きる』ではないが、人間、死を宣告されてはじめてどう生きるべきかを考えることができるのである。生だけではなく死に焦点を当て、それとどう向かい合い、それをいかに受け入れていくか、それは国や地域を問わず、また時代を問わず、等しく死を運命づけられた人間すべてに与えられた重要な課題でもある。

(本稿は、京都 D・H・ロレンス研究会編の『吉村宏一氏退官記念論集』(2011 年 3 月出版予定)のために、『^{いのち}生命の輪』への参入——蛇の表象を手掛かりに』というタイトルで提出した原稿をもとに、新たな観点を加えて大幅な加筆をしたものである。)

註

- 1) ムアの著書のタイトルが *The Priest of Love* であったことを想起しよう。
- 2) 『恋する女たち』の中でもジェラルドの死の扱いが否定的なものであったことを想起しよう。
- 3) 「平安の実相」第 1 章において、アメリカ・インディアン「死に対する勇気」を称えつつも、そこに「生に対する勇気」の「欠落」を見、死を良しとする彼らに、「絶対的な平安」を知ることのない「つまづき」を見てもいる (672)。
- 4) セイガーが「蛇」は必ずしもタオルミーナでの実体験をもとにして書かれたとは限らないという可能性を論じているので参照のこと (232-35)。しかし、たとえそうであっても、書かれた可能性はせいぜい 1918 年以前に遡ることはないだろう。
- 5) 拙論、『^{いのち}生命の輪』への参入——蛇の表象を手掛かりに』『吉村宏一氏退官記念論集』を参照のこと。
- 6) 井上ひさし氏も次のように分析する。

死には「死」という名のみがあって、その実体＝正体については皆目わからない。大学者が三千人集まって何十年も研究し、また討論し合ったところで絶対にわからない。「死」という名に実体＝正体はついに与えられないのだ。これがじつに怖い。死に「死」となづけた名付親でもわかればまた考えようもあるのだろうが、名付親の探索もできない相談である。これがなんだか薄気味わるい。そういうわけで、他の謎は解決できても、死の謎はついに解決不能だ。そここのところがなんともいえずおそろしいのである。(293)

また、心理学的なアプローチで河野博臣氏は生まれてくる時の「心的障害」故に死が恐怖として残るのだと説明する。引用してみよう。

母親から出産する際に狭い産道を通るときの、きびしいこの世への旅は、心的障害として無意識に赤児の心に痕跡を与えるであろう。不思議に思えるのは、生への旅立ちが無意識的であれ、暗黒と苦しみとの出会いであるということである。これは、人間にとって死への恐怖として深く心の奥底にきざみこまれてしまう。そして、人生の途上において、危機的な状態の中で、無意識に死への恐怖としてよみがえってくるのである。(167)

- 7) 死後世界を自ら体験できない限りは、他者の死後世界を想像力でもって間接体験をするしかない。つまりこれがよくいわれる、「一人称の死」ではなく「二人称の死、三人称の死」(山折他 43)ということだろう。

- 8) 「平安の実相」の次の引用も参照のこと。

理解する時に初めて、われわれはこの[生と死の]二元性の限界を超えて完全性へと入っていくのである。
[……]

このようにしてわれわれは死を知る。——それを経験し、生きることによって知るのである。今や死はいかなる神秘でもない。われわれは死を理解し、そうすることによってそれを超越したのだ。となれば、実際の死は、死に関する知識の具現化なのである。[……]

[……] 理解とは必ずしも知的なものではない。それはむしろ感覚と霊とにかかわるものなのだ。

しかしわれわれは知性も使って生きている。そして生における最初の偉大な行為は理解によって死を包含することだ。それゆえ、生きた知性の最初の偉大な行為は死を理解することである。これを成し遂げなくては知性には自由はないし、生きることもできない。なぜかという、創造的な生というのは死を完全に成就することだからである。(681-82)

- 9) ロレンスはやがて「無意識の幻想」においてシグムンド・フロイトのエロスとタナトスではないが、性と死が切っても切れない関係にあるということを論じることになる(194 参照)。ただ、この段階でいう死はあくまで抽象的、精神的な死であった。

因みにフロイトの精神分析学の汎性欲説では、人間には、自らの生命活動を継続し、存在を維持しようとするエロス(生の本能)と、それに先行する形でタナトス(死の本能)が相矛盾する形で先天的に内在しているという。

- 10) 詩の結末については、飯田武郎氏のように、「Snake」におけるロレンスもまた、『神の如き』([……]) 蛇の命を一瞬、直観的に感じ取れたのだったが、残念ながら彼の場合には、『教育の声』が介入し([……])、彼は蛇に棒切れをなげつけてしまう。その瞬間、彼は生の王者たる蛇の命も‘underworld’の『闇の太陽』も感じ得なくなったのである(65)と否定的な解釈をする批評家も存在するが、ここでは少なくとも「あが

なうべき狭量さ」を詩人が意識しており、後悔しているという点、ロレンスが少なくとも受け入れることの必要性の認識を新たにしている点を強調したい。

- 11) このような死の捉え方は、1923年にフリーダ（Frieda Lawrence）に語ったと伝えられるロレンスの次の言葉にもうかがえる。

死という背景は、絶えず存在しつづけ、そのため、生の全長は激烈な行動として感じられる。生は、死がその一部分である時にのみ、生である。死を生から締め出して、死は後に来ると主張する、キリスト教の観念のようにではなくて——死は絶えず存在する。（140）

- 12) エリスも次のように述べている。“Lawrence lost his Christian faith in his early twenties but was never entirely comfortable without it.” (65)

- 13) 「無意識の幻想」（1921年6月執筆）に二元論的死生観がうかがえる（150参照）。

- 14) ロレンスは必ずしも博物館を全面的に否定しているわけではない。例えば次のように条件付きで評価はしている点を指摘しておこう。

けれども、やはり博物館はどうしても設けなければならないのであれば、小さなものにすべきであり、そしてとりわけ大切なことは、それぞれ地方別に設けなければいけないということだ。フローレンスにあるエトルリア博物館は、なるほどすばらしいものであるけれども、タルキニアに来てこの博物館に入る方が、どんなにもっと幸せな気分になれることか。ここではすべての陳列物はタルキニアのものであり、だから、少なくとも、それぞれがみな互いに、ある程度の関聯性を持っており、何か有機的な一つの全体を作り上げているからである。（「エトルリアの遺跡」124-25）

- 15) ロレンス文学において「触れ合い」がいかに大切な概念であるかはコウアン（第7章参照）をはじめ、多くの研究者が論じている。実際ロレンスは様々な機会に「触れ合い」の重要性を訴える。例えばアメリカ人になるため、アメリカを知るには、「あるがままのアメリカに触れてみよ。勇気を出して触れてみよ。これは英雄的なやり方である。そして目には見えないアメリカに五感でじかに触れるということこそ、新世界における大いなる冒険となるであろう。」（「アメリカの土壌に根ざして」“Reviews of Books: *In the American Grain*, by William Carlos Williams” 335）とロレンスはいう。トリガント・パロウの本の書評（“Reviews of Books: *The Social Basis of Consciousness*, by Trigant Burrow”）の中でも、人間にとっての触れ合いの重要性について触れていたことを思い起こそう（379、382参照）。

- 16) 興味深いことにロレンスは、キリスト教をはじめ、様々な宗教の中で死後世界を地獄と捉えるようになったいきさつを次のように語っている。

自分を大自然と調和させよう、そして自分であることを失わず、そして泡立ち渦巻く広大な生命の海の中で花開くものとなろう、そういう深遠玄妙な人間の努力に外ならなかった古代の宗教は、ギリシア人たちやローマ人たちの登場と共に変化して、自然に抗したいという欲望となった。狡猾な技術と機械の力を作り出して、母なる自然の裏をかき、自然をがんじがらめに、完全に鎖で縛りあげ、遂に最後には自然界に自由なるものは何一つなくなり、すべてを人間に統制され飼い慣らされて、人間のより卑しい目的のために使役されるものにしたいという欲望となったのだ。実に奇妙なことであるが、この自然を征服するという思想といっしょに陰惨な冥府、地獄と煉獄という思想も生じたのである。偉大な自然宗教を信じてい

た民族や国民にとっては、来世の生活は驚異に満ちた生の旅の続きに外ならなかった。自然の征服という思想を信ずる民族や国民にとっては、来世の生活は地獄であり、もしくは煉獄であり、もしくは虚無であり、天国なんてものを創り出してみても、とても追っつきはしないのである。（『エトルリアの遺跡』174）

17) 井上義夫氏も次のように論じている。

古代ローマに滅ぼされた「邪悪な」エトルリア人が、実はおおどかな種族であった証しを目の前にしたとき、おそらくロレンスは「本能的にそれに惹きつけられ」、今は死の領域に入ってしまった人々を新しい眼で見始めたのである。その瞬間、彼はメキシコの異様に残虐な神々とその像から解放されたのだと私は想像する。（318）

18) 蛇がロレンスにとって特別の生物であったことは、「ヤマアラシの死をめぐる随想」（“Reflections on the Death of a Porcupine”）に描かれるヤマアラシに対するロレンスの態度を「蛇」における蛇に対する態度と比較すれば一目瞭然である。目の前にいるそれら生き物を殺すべきか否かという葛藤を両生物に対して抱える中、ヤマアラシについては最終的にライフルで殺してしまうのに対し（526、531、532 参照）、蛇については最終的に畏敬の念を感じ、「生の王者」とさえ表現するに至るのである。

19) 紙面の都合上、多くは紹介できないが、他にも、V・ハイド（Hyde）も指摘するように蛇は、エデン神話の中の誘惑者（20）、あるいは救済者としての「真鍮の蛇」（159、189）など、聖書の中の蛇（「無意識の幻想」188に、聖書の中に登場する蛇のロレンス独自の分析が見られるので参照のこと）への連想を促すかと思えば、ウロボロスや、脱皮をすることから復活の象徴としての役割も果たす。また蛇は、不死や治癒、罪からの癒しの象徴でもあり、他にもロレンスは蛇を「雨神への使者」と捉えたり、「潜勢力の源」（大地の中心に潜んでいる「強烈な暗黒の太陽」に誰よりも近いところに存在する潜勢力）とも捉えている（「メキシコの朝」“Mornings in Mexico” 78）。以上のように、蛇の表象は多様で、その象徴は原罪の象徴だけに限られることはないのである。

20) ロレンスがエトルリア人を「陰惨な、極悪な、のた打つ蛇の如き邪悪の民」（『エトルリアの遺跡』174）と、邪悪な蛇に譬えている点も指摘しておこう。もっともロレンスはそれを「絵空事」としており、エトルリア人を邪悪視するローマ人の立場で描写した表現にすぎないことを断っておく。

21) ライオンの頭と山羊の胴体、蛇の尻尾を持ち、口から火を吐く想像上の動物。とりわけエトルリア文明の遺物であるブロンズ像「アレツオのキマイラ」は有名。

22) 肩からは百の蛇の頭が生え、目からは火を放ち、腿から上は人間と同じだが、腿から下は巨大な毒蛇がとぐろを巻いた姿の生き物。

23) 他にも「貴族」（“Aristocracy”）の中で、ロレンスは次のように主張している。

この世に存在するものすべては他の存在するものすべてと関連している。だから、すべての生き物は他のすべての生き物とかかわりを持っている。（475）

人間の偉大さは、人間と生ける宇宙との関係がいかに深く活力に満ちているかによって決まる。（478）
『黙示録』の結末部分にも同様の境地がうかがえるので参照のこと。

24) 魂の大切さについて、ロレンスは次のように論じている。「大切な宝の中でも最も大切な宝は魂であった。それはあらゆる生きもの、あらゆる木にも池にも内在するもの、そして火的性質と水的性質というこの二元

性を形成する二つの部分、二つの要素の間の釣合い、もしくは均衡を知覚するあの神秘的な意識の切点を意味している。[……]そして個体は死んでも魂はけっして消え失せることはなく、あの卵の中に、あるいは壺の中に、あるいはあの木の中にすら保存されていて、そこから再び芽吹き生まれてくるのである。しかし、魂そのものは、あらゆる生きものの意識であるこの火花は、二元的性質のものではない。そしてそれは不滅なるものであるが故に、同時にまたそれはあの祭壇でもあり、これに我々人間の肉体の必ず滅ぶべき性質と我々の二元性とが、最後に生贄として捧げられるのである」(『エトルリアの遺跡』 154-55)。「無意識の幻想」の中でも次のように論じている。「[……] 生命とは、生き生きとした自発的な魂以外の何物でもない。その魂こそが我々の中心的な実在なのだ」(152)。

- 25) ロレンスの死生観は、ある意味近年の遺伝子研究に見られる発想を想起させる。以下の引用を参照のこと。「個体を遺伝子保存のための生存機械にすぎないといったドーキンス([……])のセンセーショナルな表現は我々を驚かすが、ここには生物学的にみた死の本質が隠されている。遺伝子なりさらに正確にはDNAなりを、自己複製しつつ永続する生命の基体とみれば、生物個体はその基体を不変のままに維持するための実に効果的な手段にほかならない」(内堀他 29)。
- 26) 筆者はこれまで様々な機会に拙論の中でロレンスの想像力が、下へ下へ、奥へ奥へと向かう「大地的想像力」あるいは「深みの想像力」ともいうべき想像力であることを強調してきた。内堀氏たちも論じるように、死は「我々の想像力の『発明』したさまざまなイメージによって構成される」もの、つまり「死というものは実は想像力の領域に属するもの」(41)であるからには、現代において死に対する問題意識が希薄になっている原因は、想像力の貧困化とやはり無関係ではないだろう。
- 27) ロレンスは善悪の二元論的な捉え方を否定している。つまり、「豹と鹿、ライオンと牡牛、猫と鳩もしくは鶉」といった組み合わせは、「根源的で偉大な二元性、即ち動物の王国にもある両極性と切り離せぬ一部をなしている」ものの、それは「善き行為と悪しき行為の対比をあらわしているのではない」というわけである(『エトルリアの遺跡』 154)。
- 28) セイガーも述べるように、ロレンスのエトルリア人の捉え方については、例えばエトルリア人が植民地支配をし、人身売買をし、奴隷を使っていたといった、よく知られている事実を無視したものにはなっているが、エトルリアの遺跡を巡る彼の解釈については、慧眼をもって捉えた興味深いものになっているといえよう(309)。

引用文献

- Brewster, Earl and Achsah. *D.H.Lawrence: Reminiscences and Correspondence*. London: Martin Secker, 1934.
- Cavitch, David. *D.H.Lawrence: The New World*. New York: Oxford UP, 1969.
- Cowan, James C. *D.H.Lawrence and the Trembling Balance*. University Park: The Pennsylvania State UP, 1990.
- Ellis, David. *Death & the Author: How D.H. Lawrence Died, and Was Remembered*. Oxford UP, 2006.
- Gilbert, Sandra M. *Acts of Attention: The Poems of D.H.Lawrence*. Ithaca and London: Cornell UP, 1972.

- Huxley, Aldous. Introduction. *The Letters of D.H.Lawrence*. London: William Heinemann Ltd., 1956.
- Hyde, Virginia. *The Risen Adam: D.H.Lawrence's Revisionist Typology*. University Park: The Pennsylvania State UP, 1992.
- Lawrence, D.H. *Apocalypse*. Harmondsworth: Penguin Books, 1977.
- . "Aristocracy." *Phoenix II*. Harmondsworth: Penguin Books, 1978.
- . *The Complete Poems of D.H.Lawrence*. Ed. Vivian de Sola Pinto and W.Roberts. Harmondsworth: Penguin Books, 1980.
- . "Autobiographical Sketch." *Phoenix II*.
- . "Cypresses." *The Complete Poems of D.H.Lawrence*.
- . "Etruscan Places." *Mornings in Mexico and Etruscan Places*. Harmondsworth: Penguin Books, 1975.
- . "Fantasia of the Unconscious." *Fantasia of the Unconscious and Psychoanalysis and the Unconscious*. Harmondsworth: Penguin Books, 1977.
- . "The Hopi Snake Dance." *Mornings in Mexico and Etruscan Places*.
- . *The Letters of D.H.Lawrence I*. Ed. James T. Boulton. Cambridge: Cambridge UP, 1979.
- . *The Letters of D.H.Lawrence III*. Ed. James T. Boulton and Andrew Robertson. Cambridge: Cambridge UP, 1984.
- . *The Letters of D.H.Lawrence V*. Ed. James T. Boulton and Lindeth Vasey, Cambridge: Cambridge UP, 1989.
- . "Mornings in Mexico." *Mornings in Mexico and Etruscan Places*.
- . "New Mexico." *Phoenix: The Posthumous Papers of D.H.Lawrence 1936*. Ed. E. D. McDonald. New York: The Viking P, 1968.
- . "The Reality of Peace." *Phoenix*.
- . "Reflections on the Death of a Porcupine." *Phoenix II*.
- . "Return to Bestwood." *Phoenix II*.
- . "Reviews of Books: *In the American Grain*, by William Carlos Williams." *Phoenix*.
- . "Reviews of Books: *The Social Basis of Consciousness*, by Trigant Burrow." *Phoenix*.
- . "Snake." *The Complete Poems of D.H.Lawrence*.
- . "Study of Thomas Hardy." *Phoenix*.
- . "Whistling of Birds." *Phoenix*.
- Lawrence, Frieda. *Not I, but the Wind...* London: The Viking P, 1934.
- Lockwood, M.J. *A Study of the Poems of D.H.Lawrence: Thinking in Poetry*. Basingstoke and London: Macmillan P, 1987.
- Moore, Harry T. *The Priest of Love*. London: Heinemann, 1974.
- Sagar, Keith. *D.H.Lawrence: Life into Art*. Harmondsworth, Viking P, 1985.

- 青柳正規. 「日本語版監修者序文」. 『「知の再発見」双書 37 エトルリアの文明 — 古代イタリアの支配者たち』.
ジャン＝ポール・テュイリエ著. 創元社, 1994.
- 飯田武郎. 『D・H・ロレンスの詩 — 「闇」と光をめぐって』. 九州大学出版会, 1986.
- 井上ひさし. 「死の前での平等」. 『叢書 文化の現在 — 6 生と死の弁証法』. 大江健三郎・中村雄二郎・山口
昌男編. 岩波書店, 1980.
- 井上義夫. 『地霊の旅 — 評伝D・H・ロレンス III』. 小沢書店, 1994.
- 内堀基光, 山下晋司. 『死の人類学』. 講談社学術文庫, 2006.
- 梅原猛. 『日本人の「あの世」観』. 中公新書, 2001.
- 柏木哲夫. 「『死の教育』が『生の教育』に」. 『朝日新聞』. 1993.5.12.
- 河野博臣. 「痛みと死と」. 『叢書 文化の現在 — 6 生と死の弁証法』.
- 佐々木馨. 『生と死の日本思想』. トランスビュー, 2006.
- 田部井世志子. 「『生命の輪』への参入 — 蛇の表象を手掛かりに」. 『吉村宏一氏退官記念論集』. 朝日出版社, 2011 (3
月出版予定).
- 寺田建比古. 『「生けるコスモス」とヨーロッパ文明 — D・H・ロレンスの本質と作品』. 沖積舎, 1997.
- パスカル, B. 『世界の大思想 8 パンセ』. 松波信三郎訳. 河出書房, 1969.
- 山折哲雄, 島田裕巳. 『日本人の「死」はどこにいったのか』. 朝日新書 115. 朝日新聞出版, 2008.